

一学期の抱負とその展開



清水エミ子

「今日、四時から8チャンネルで、〇〇〇〇やるな、きみ見てる」

「ぼく、夕方いつでもるすばんしてるんだよ。ひとりだってへいきだよ、テレビかっこのいいやつてるから、ずっと見てればいいものね。マンガがずっとあるものね」

「あたしも妹といっしょにテレビ見て、るすばんしてるんだ」

「少しおつかいにつれて歩こうと思って『行きましよう』といっても、『でかけると、5時からの、〇〇〇〇テレビ見られなくなるからいかない』といっついてきたがらないのです。ときどき親の方がさみしくなることがありますよ」という母親。

テレビに育ててもらっているのではないかと思われるような子どもたち、テレビのチャンネルは、数字がよめなくても正確にカチャンと回せるくせに、自分のいろいろな行動、生活の中で活動のスイッチはいっこうに、カチャンと入らないのです。テレビのチカチカしたスピードに反比例して、子どもたちの行動も思考力も、のんびりのっそりしてしまっている。

こんな状態の子どもたちに、ガッチリダイヤルを合わせ、電流を通して、元気に活動できる子にするのには、どうしたらよいのだろうか。自分の力で、人生を開拓していける子にするのには、私たちおとなは、どう子どもたちの前に立ち向かったらよいのだろうか、と考えると、ああもしたい、ここもこうしてみようと、果てしなくその未来は広がっていくのだ。

一、一年保育の五歳児の入園当初

・一日も早く子どもたち自身で楽しく行動できるようにしたい。集団の中でじっととまっていず、自分の足で、歩き回りながら、自分の世界を開拓していける子にしたい。
・幼稚園の中を、縦横無尽に動き回って活動し、楽しくだれとでも話しあえるようにしたい。

・子どもたちで、楽しみながら、暮しのリズムを作り出させたい。

・考えて行動し、やってみて、確かめ、くりかえしながら正しいものを自分でつかみとらせたい。

・困難なことがらを友だちと協力して解決していける、ねばり強さを身につけさせたい。

・簡単なことから自分の力でやれたという成功感を味わわせ、やればできるといふ喜びと自信を持たせ、どんなことにも勇氣と自信をもってぶつかっていける子にしたい。

・絵本やおはなしを楽しめる情操豊かな子にしたい。

・ひとつひとつの活動に楽しみながら参加し、大きくなった時に楽しい思い出になるように、活動の展開を楽しいものにしたいたい。

私の抱いている幼児像のようなものが、ポーンと目の前に広がっていく。

・「あのねえ、先生」「先生、このほうがいいでしょ」と、いつでも子どもの生き生きした声と、動きがみちあふれている学級。

・そして、ひとつのことをやり出すとシーンと静まりかえって物ごとに熱中できる学級。

・「〇〇くん、こうやってみれば、こうやるといいよ」「うんありがとう」と明るく交わる(教え合う)雰囲気のみちあふれている学級。

と、こんな望みを胸いっぱいにつめこんで、入園式の時、子どもたちの前に立つのだ。

そして、私の学級がスタートする。

いろいろの問題が山積している子どもたち、どれからどう手をつけたらよいか迷う。しかし私は、いつもひとつのことがらを自分にいい聞かせながら、あせらず、ゆっくり、見間違わないように時間をかけて、ひとつひとつを、どう仕向けたらよいかと、問いかけながら問題に立ち向かうようにしようと努力している。

これこれの活動は五歳になったらこままでできなくてはいけないのだと、どこかの保育書まるうつしを決めつけるのではなく。

「こんなことが、このような状態で起こってきたからどのように仕向けていかなくはないか」と、子どもをみつめなおすことを(子どものありのままの状態から学ぶことを)第一に考えなくてはと思っている。

だから一日の保育を、子どもが帰ったらすぐ、

・子どもは楽しんだか。

・おちこぼれは、いなかったか。

・子ども自身の活動になっていたか。(保育者が決めつけで、活動をさせなかったか)

・あしたへの発展があるだろうか。

・どこをどのように反復させながら、次への段階にのぼらせたらいのか、を反省し、評価しながら、ゆっくり一步一步、坂道をはたいていこうと考える。

一 たのしい幼稚園を知らせるための活動と展開

(みんなといっしょにいると楽しいことを知らせる)

○新しい友だち

今まで知らなかった同年齢の友だちをひとりでも多く、スムーズに知らせていくのに役立つ活動を多く取り入れる。

- ・あくしゅで手をつなごう。
- ・あなたの名前はなにに。
- ・名札の見せ合い。
- ・同じおもちゃで遊ぼう。
- ・同じ道を通ってくるもの同士、いっしょの机にすわったり、いっしょに歌を歌ったりする。
- ・同じ道を通ってくるもの同士のお母さんもいっしょに、なかよしになることを考えて、入園式の時の親の座席なども、クラス別地域別に作っておくのもよい。

二、集団生活に、きまりのあること、そのきまりを守って生活すると楽しいし、気持のよいことを知らせるために役立つ活動の展開

○時間を守らなくてはいけない

・登園時間を守ること、おくないで幼稚園にくることを、まず楽しく知らせる。「時計の針が、こんななかつこうになるまでにくるんだわね。みんなは、どんななかつこうの時にお部屋に入ってきたかしら」と、時間に関心を持たせる。

○きまった持ち物(所持品)

・おそろいの上衣をきて、ハンカチ、はな紙を持ってくる。

・かばんをしょって、帽子をかぶってくる、などを知らせる。
右のポッケはハンカチあるかな、左のポッケにチリ紙あるかな、自分で、でかける前に調べましよう。

入園当初、不安な気持のとりきれない時、自分のポッケからハンカチ、はな紙を出してひろげたり、たたんだりして、自分のもの、身近に親しんでいるものをさわることで安定して、その場になじんでいけるようになる。ゆっくり時間をかけて知らせます。

カバンをかけるのも、まがらず、まっすぐかける。かけ方も、「こうしよう」というのでなく、カバンのきれいなかけ方がしをして、どっちがきれいなかけ方か、自分の目で見てくらべて、考えてしまつでできるように仕向ける。「こうしなさい」でなく、はじめから五官を通し、自分の力で正しいものをつかみとっていく態度を知らせていく。

○交通のきまりを守って通園する

・ばくぜんと知っていた交通のきまりをはっきり知らせる。
・きまった道をきたり、帰ったりする。
・横断は、手をあげて、右左を見てわたる。
これも現場で、実地にやってみる。警察の交通係りの方に手伝ってもらって、入園してすぐにやってみることが大切である。

○おもちゃで遊ぶ

・保育室のいろいろのおもちゃで遊びながら、友だちとの交わりを知らせたり、幼稚園の環境に慣れさせる。
・おもちゃの位置やおき場所を毎日変化させておく。

・新しい環境にして毎日毎日を新鮮な感覚で生活できるようにしておく。

・あまり大きく変化させ過ぎると、かえって安定を欠き、不安定になるので、その程度は適当にしないでほならない。

・積木などきちんと決められた所に整とんだけしておくのではなく、室の数個所に散らばしておいてみる。

・あまりきちんとしてあると、どこから手を出してよいかとまどうことが起こるから、らかな雰囲気でおいてあると思わず手を出して遊び出すことができるからだ。

・マリ、ママゴト道具なども、ところどころにいろいろな環境で設定するくふうをする。

・そして思いがけない交わりの場と、遊びのきまり、遊び方などをのがさずみつめ、指導助言の場を大切にするとともに、ひとりひとりの子どもの状態を早く把握することに役立てる。

○園庭の花壇を見たり飼育動物を見たりえさをやったりする

・ひとり遊びだしにくい子、保育室に抵抗を感じている子などと手をつないで戸外に出て花壇を見たり、飼育動物（カメ・キンギョ・ウサギ・小鳥など）の動きを見たり、そつとえさをやってみたりしながら、子どもたちの興味の傾向をキャッチすることが大切。

・じつとみつめている目や顔の表情からひとりひとりの特徴をみきわめるように。

・ばくせんと見守るのでなく、目的意識をもって見守るようにし

たいものである。

・小さな変化を入園当初は、たくさん見つけることに心がける。

この変化はブラブラ歩きをしている時、ボンヤリ花を見たり動物の動きをながめている時に、子どもたちの本来の姿として表わしてくる。

・そして保育者はゆっくりとしたテンポで、静かに子どもたちに話しかけるようにする。まず、保育者とのつながりをしっかり持つてから集団に気楽に入っていけるように仕向ける。その仕向けるキツカケを園庭をブラブラしながら見きわめることも大切なのだ。

○みんなで歌う

・みんなの知っている歌を自由に歌い合いながら、みんないっしょだ、みんなの声の中に、自分の声もまぎっているということを知らせながら歌う。

・机ごとのグループといっしょに歌ったり、女の子だけ、男の子だけ、というようにいろいろなグループ（形式）で歌って、グループにいろいろなことを活動しながら知らせていくようにする。（一年保育児なので、特にこんなことは意識的にやってみるようにこころがけたいもの）

・声を出して歌うことの楽しさを知らせ、保育室の中がいつも気楽に歌声がながれるように、保育者は、ふだんも歌を口ずさめる雰囲気をつくるように心がけたい。

○自由にクレヨンやマジックインクを使って描く

・大きな紙（模造紙・ラシヤ紙など）にみんなで、ぬたくって遊

ぶことから楽しませる。

・小さな画用紙にクレヨンで、何かを描かせることをいそがず、クレヨンで描けることのふしぎさと楽しさをまず知らせる。

・そして描くこと(何かまとまったものを)に対する抵抗を取りのぞいていく。

・こんなことを十分にしたあとでなら心に感じたことをだまっても描きたくなって、ひとりで表現するようになるのだ。

・材質になじむこと、材質を知らせることを第一に考えたい。

○はさみで、チョコチョコ切ったり、はったり

・家庭では、あぶながって自由に使わせてもらえなかつたはさみを自由に使いこなさせるために使わせる。

・何かの形を切るのではなく、はさみの切れる心地よさを味わわせる。

・そしてはさみの扱い、持ち歩く時、(自分の戸棚から持ち出してくる時)はさみの刃の方をぎゅっと握って持つてくる。はさみで切つてはいけないものは、やたらに切らない、などを、約束しながら使わせる。

・きちんとした紙などをはじめに与えるのではなく、気楽に切れるもの(失敗感を味わせないですむもの)から与える。

・新聞紙、包装紙、広告紙などを自由に切りぎませてみる。

・その切りぎざんだものを、カラーの台紙にのりで思い思いにはらせてみる。思いがけない構成の楽しさと美しさを知らせる。

・切りぎざんだものの残りをみんなでダンボールにはりつけて、

ボール入れをこしらえたり、材料入れを作ったりして共同製作のやり方なども自然に知らせていくように心がける。

・ここで大切なことは、みんなひとりで考えて、自分の手で作りあげたものであることをくりかえし知らせ、自分でやったんだ、やればできるのだ、という自信をしっかりと持たせたい。こんな活動をていねいに時間をかけて扱ふことによつて、五月、六月と活動が進んできた時、母の日、父の日などのプレゼントつくりや、共同製作などのやり方をはやく把握していくのだと思う。

○散歩に行く

みんないっしょに行動すること、保育者のいう通りに行動することを知らせる。そして友だちとしっかり手をつないで歩くことから、友だちのぬくもりを、じかにはだから知らせる交わりの場にしたい。

前の友だちについて歩く。これは簡単なようで、子どもたちにはなかなかむずかしいことなので、一べんにたくさん歩かせず、ほんの少しずつとなりの家に行くくらい距離からはじめて、繰り返しながらだんだんたくさん散歩するようにしたい。

○鬼遊びをする

自分だけでは遊べない遊び、相手を意識して遊ぶ遊びをさせ、遊びや活動には、それぞれ役のあることを知らせたい。そして役割分担ということをスムーズにわからせ、実際にやれるようにしたいのである。

つかまえる鬼の役と、逃げる役とがあつて、鬼遊びが成り立つ

ことを知らせる。

- ・まず、保育者が、鬼の役になって、子どもが逃げる。
- ・それから、子どもの鬼が、帽子をかぶったり、物をもったりして、(鬼であることを目じるしをして) 友だちをおいかける。

こんな遊び(体をふれあいながらする)を通してそれぞれの友だちを知らせていく。体を動かして遊ぶ楽しさとルールのある遊びのおもしろさ、それを守って遊ぶことの楽しさなどを知らせる。

○誕生会

友だちの喜びを、すなおに喜んだり、祝ってあげたりする、やさしい心を育てたい。

四月に生まれた友だちに、おめでとうをいい、ありがとうのあいさつをいうことを知らせながら、いろいろのあいさつのあることをわからせる。自分の気持ちをすなおに、ことばでいい合えるようにさせる。

友だちが大きくなったことを喜び、もっと元気なよいことになるように、みんなで励まし合うことを知らせる。そのために誕生日の約束をする。「六歳の約束」と子どもたちは、いつている。

- ・交通事故にならないようにね。
- ・病気になるないようにね。
- ・もう泣き虫しないでね。
- ・失敗してもがんばってやりなおしてね。

というように、その子にあった努力点をひとつふたつ約束し

て、努力させるようにする。そして仲よしになった友だちと、握手をしながら、「約束します」とちかわせるようにする。この約束を友だちの手作りの誕生カードに記して、おくりものにする。

○はじめてのお弁当

生まれてはじめてひとりでする食事。楽しみにしている気持ち、ちゃんと食べられるかなという不安もまじっている。

家庭では母親などが、食べるばかりに準備してくれたものを、はしを持って口にはこべばよかった。しかし集団生活では、自分でカバンの中からお弁当を出して、食べられるように準備しなくてはならないのだ。

当然知っているとと思われるようなことから(お弁当の手前にはしをおく、はしをおいてお湯を飲む、など)まで、ていねいにくりかえし、確かめながら知らせていかななくてはならない。

正しい食事のマナーは、短い間にきちんと身につかせねばならないのです。

- ・こぼれたごはんやおかずはひろって食べない。
- ・口にごはんを入れたまま、しゃべらない。
- ・はしを持ったまま、お湯を飲まない。
- ・おかずとごはんといっしょに食べる。
- ・「いただきます」「ごちそうさま」をきちんとするようにさせる。

食べる前、食べ終わったあとの手洗い、うがい、食後の休息などを、時間をかけて知らせるようにする。

これら、ひとつひとつのきまりを、集団でする時の方法を、子どもたちに考えさせ、きまりの必要をわからせるようにする。

数少ない水道を、どのようにして使ったらよいか、おぼんをどうやって取りに行ったらよいか、こぼれごはんをどこにしまつたらよいか、なぜ、口にごはんを入れてしゃべってはいけないのか、はしを持って、お湯を飲むとどうしていけないか、数が少ないから、ならんで順番にする、などのようにそのつど具体的に知らせるようにする。具体場面で、ひとりひとり知らせないと、いわれなくてはしない子、自分から進んでやれない子ができてしまうので心配しなくてはならない。

楽しくお弁当を食べさせ、食べたものが栄養になり、エネルギーになるように習慣づける。

一年保育児の入園当初は年少児の入園当初のカリキュラムから出発し、だんだん二年保育、年長児と差がなくなるように指導しなくてはならない。そのため、入園当初の一日一日を、きめの細かな計画で進めていかななくてはならない。

入園したばかりだから、「まだいい、まだいい、そのうちに」は、一番危険な考え方である。

五歳児（年長）は、入園当初といってもこちらの仕向け方で、どんなでも方向づけができる可能性があるのだ。子どもたちが、楽しんでできる活動の配列を、子どもの状態に適したもの、その学級の進度に合ったものを順序立てて、考えていかななくてはなら

ないのだ。

こんなことかと思うこと今まで、細心の配慮をし、子どもを甘やかさず、ひとつひとつの活動を通して、自分で自分を確かめながら発展させていけるようにしなくてはならない。

まず、やってみる子、やってみて考え、くりかえし確かめながら、自信とやりぬく信念を身につけた子に育てたい。

（足立区立関屋幼稚園）

日本保育学会第21回大会

会期 昭和43年5月18日（土）・19日（日）

会場 宮城学院女子大学

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

連絡先 仙台市東三番丁一六六

宮城学院女子大学内

日本保育学会第21回大会準備委員会

TEL—〇二二二の二一の六二一